

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02056

研究課題名（和文）沖縄戦の生活史と戦後沖縄社会の構造変容

研究課題名（英文）The Life History of the Battle of Okinawa and Post-war Societal Structural Changes in Okinawa

研究代表者

岸 政彦（Kishi, Masahiko）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：20382004

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、沖縄戦と戦後の沖縄社会における構造変容を、個人の生活史の分析を通じて探ることを目的とした。具体的には、沖縄戦の生活史を通じて戦争の影響を分析し、戦後の社会変化とその影響を明らかにした。

戦争体験に関する口述記録や文書資料を収集し、沖縄戦時の生活史を詳細に記録した。戦後の沖縄社会における経済、教育、文化などの構造変容を分析した。特に、米軍基地の設置や地域経済の変化が、沖縄社会に与えた影響に焦点を当てた。現地調査の結果を踏まえて、沖縄社会の歴史的な転換点や将来の展望について考察した。戦争とその後の社会変化が、地域社会のアイデンティティや経済構造に与える影響について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

沖縄戦と戦後の沖縄社会の構造変容に関する深い理解を提供した。個人の生活史の分析を通じて、戦争の影響と社会変化の複雑な関係が明らかにされ、学术界や社会に貴重な知見がもたらされた。また、地域社会のアイデンティティや経済構造への影響を明らかにすることで、沖縄の歴史に関する理解を深めることができた。この研究成果は、歴史的な事象の理解や地域社会の発展に貢献し、学術的な価値と社会的な意義を両立している。

研究成果の概要（英文）：This study aims to explore the structural transformations in Okinawan society during and after the Battle of Okinawa through the analysis of individual life histories. Specifically, it examines the impact of the war and elucidates the subsequent societal changes. The research involved collecting oral testimonies and documentary evidence related to wartime experiences to meticulously document the life history of the Battle of Okinawa. Furthermore, it analyzed the post-war structural transformations in areas such as the economy, education, and culture in Okinawan society. Special attention was given to the effects of the establishment of U.S. military bases and changes in regional economies. Drawing on the findings of field surveys, the study discussed historical turning points and future prospects for Okinawan society. It also examined the impact of war and subsequent societal changes on the identity and economic structure of local communities.

研究分野：社会学

キーワード：沖縄 生活史 沖縄戦

## 1. 研究開始当初の背景

私たちはよく、沖縄とは共同体社会である、という。それはある程度までは事実といってよいだろう。たとえば沖縄の「家族主義規範」の強さについては、いくつかの実証的な研究がある。

しかしこの共同体規範について、温かい相互扶助の社会としてしか捉えないとすれば、それはただの植民地主義の裏返しとしての理想化にすぎない。共同体社会というものは、沖縄に限らず、過酷な面を持っている。たとえば筆者は、打越正行、上原健太郎、上間陽子と共著で、『地元を生きる 沖縄的共同性の社会学』（ナカニシヤ出版、2020年）で、そのような共同体のなかの格差や排除について描いた。

沖縄の社会規範というものがもしあるとすれば、それは単なる「温かい相互扶助」としての共同性、という単純なものではないだろう。むしろそれは、過酷さも少なからず含みこんだ、「自治の感覚」とでも呼べるものかもしれない。もちろんここでいう「自治」とは、近代的な、合理的な、民主的な自治という意味ではない。それはいわば、「お上に頼らない生き方」ということである。自分のことは自分で決める、家族のことは家族で決めるという感覚。法や制度よりも、地縁や血縁を重視する感覚。自分や家族の財産や安全は、自分たちで守るしかないという感覚。私はすでにいくつかのところで（『はじめての沖縄』新曜社、2018年など）こうした沖縄の「自治の感覚」について書いている。いずれにせよ、それはおそらく、沖縄社会がたしかに持つひとつの「特徴」である。こうした規範や感覚がもし実際に存在すると言ってよいなら、それは一方で、人びとに対して優しく包摂的なものとして機能もするだろうし、不合理で過酷な排除を伴うものとしても機能するだろう。そして沖縄の外側からやってくる研究者の目には、このうちの前者の姿しか写らない、ということもあるだろう。

沖縄の（本土と比べた上での）こうした特殊性、固有性、個別性を過度に強調することは、ある種の植民地主義的な民族本質主義に陥ることである。しかし同時にまた、沖縄の「特質」のようなものが、メディアや社会運動や社会学によって構築された「イメージ」でしかないと言ってしまうことは、あの悪しきポストモダニズムの構築主義の「言語論的に転回された泥沼」に陥ってしまうことでもあるだろう。なぜなら、沖縄は確かに、本土とは異なる歴史的経路を経験しているからだ。

異なる歴史的な道を辿った社会は、おそらく異なる社会になるだろう。私がここで言いたいのは、単純なことである。沖縄の社会構造や社会規範に、相対的にだが本土と異なる面があるとすれば、そしてこのような、いわば「素朴実在論的な」言い方が許されるとすれば、それは民族の本質というものとは関係なく、ただ歴史的な、社会的な、「世俗的な」要因によるものであるだろう。そしておそらく、沖縄の「社会」について考えることは、こうしたどこまでも世俗的な、異なる歴史を経て異なる構造にたどり着いた、その道筋を描く、ということになるに違いない。

この「自治の感覚」は、沖縄の戦後史のなかで、どのように構築されてきたのだろうか。この問題に正面から完全に答えることはここではできない。しかしここでは、沖縄という固有の場所の固有の歴史を固有の角度からたどり直すことで、この「感覚の歴史」を素描したいと思う。

この目的のために本プロジェクトでは、50年代終わりから60年代初期にかけての『沖縄タイムス』の社会面記事を中心に、「所有権の解体と再編成」が社会規範にどのような影響を与えたかについて考える。どちらかといえば理論志向の強い本書のなかで、本稿は、当時の新聞記事をただ並べたモノグラフでありケーススタディである。しかしこのモノグラフを通じて、所有権が解体したあと、「自分と家族のことは自分で守る」社会がどのようにして形成されてきたのかについて、いくらかの手がかりを与えることはできるだろう。

## 2. 研究の目的

沖縄社会の生成と変容を、沖縄の戦後史を体験した個人の生活史から描き出す。これが本研究の目的である。

数十人の沖縄戦体験者から、戦前から沖縄戦と占領期を経て今日にいたるまでの生活史を聞き取る。これまで沖縄戦体験者の語りは、戦時経験だけに限定されることが多かった。しかしここでは、戦前からはじまり、沖縄戦での生き残り経験、復興期の生活再建の物語、復帰前の高度成長期における生活戦略、そして今日に至る人生の語りを収集し、沖縄社会の戦後の継時的な構造変容を、個人の生活史から分析する。

沖縄社会は、日本本土とは異なる規範や慣習を色濃く残している。それは基本的には、前近代的な血縁・地縁関係に基づく規範と慣習である。このような社会が、いかにして成立し、維持されているだろうか。沖縄戦とその後の復興の時期は、いちど社会規範が解体された時代だった。この社会解体と、そこからの復興と成長のなかで、これらの「沖縄的なもの」が歴史的に構築されてきた。この歴史的な社会の生成と変容のプロセスを個人の側からみることで、個人的経験と社会構造とのリンクを明らかにできる。この点で本研究は社会学理論・社会調査方法論の発展にも寄与できるだろう。

## 3. 研究の方法

この研究を通じて合計で80名以上の沖縄戦体験者からその生活史を聞き取ることができた。

そこで得られた戦前から沖縄戦を経て戦後の成長期にまでいたる語りのなかで、沖縄社会の構築を考えるうえできわめて重要なエピソードがいくつも語られた。そのうちのいくつかをいかに並べてみよう。

- (1) 沖縄戦直前、各地の小学校や大きな旧家などに、すでに日本兵が駐屯していた。公共の学校や役所だけでなく、個人の住宅にまで日本兵が居住し、沖縄人と生活をともにしていたが、その際に住民の所有権に対する補償は何もなく、地元の家屋や食料を、日本軍が好きなだけ使用していた。
- (2) 地上戦が激化し、南部への逃避行がはじまると、家族は解体され、バラバラになって逃げ延びていった。収容所で再会したのも多かったが、多くはそのまま生き別れとなった。また、南部の逃避行の途中で、親をなくした子どもを拾って一緒に行動することもあった。
- (3) 逃避中は、通りがかった他人の家や畑から盗んだ芋や砂糖黍を食べることで飢えをしのいでいた。空襲や艦砲射撃をかくぐって逃げている最中に、そのような行為は特に逸脱とはみなされなかった。
- (4) 戦争が終わって捕虜になったとき収容所に収容されることになったが、そこから出て民家に住まわされることも多かった。そのほとんどは個人所有の家屋だったが、米軍が強制的に接収し、ほかの住民を強制的に住まわせていた。
- (5) 戦争が完全に終了して占領期が始まり、住民たちも基地内の軍作業などの仕事に就くようになると、基地内の食料や物資を勝手に持ち出して、飢えをしのいだり、売りさばいて生活の足しにすることが多かった。沖縄ではこれを「戦果」を呼び、「誰も泥棒とは思わなかった」。

その他、復帰前・高度成長期における「商魂たくましい」生き方や、バーやキャバレーなどの風俗文化に関する語りを収集することができた。そして、その多くが、戦前から戦後の成長期にかけて、沖縄でみられた、ある種の「社会秩序の一時停止状態」という歴史的事実について語られていたのである。

この状態とは一言でいえば、「所有権」が曖昧になり、あるいは強制的に取り上げられ、そしてその隙間であらたなルールによってあらたな所有関係がふたたび形成されていくプロセスである。

こうした現象は、沖縄戦の最中だけでなく、すでに戦前の日本兵の駐屯から始まっていて、そして戦後の復興期を経て、高度成長期にまで続いている。今回、聞き取り調査のテーマを沖縄戦だけに限定せず、その後の長い人生を含む生活史を聞くということに設定したために、この、「所有関係の解体と再編成」のプロセスを克明に聞き出し、そして複数の時代にまたがるこのプロセスを、ひとつの統一した経験として統合して考えることができた。生活史調査という手法の有効性もまた、本調査によって確認することができたのである。

この、戦前から戦後にかけて沖縄が経験した「所有権の解体と再編成」を、沖縄社会の「はじまりの経験」と呼ぼう。そして、この「はじまりの経験」によって、現在もなお残る沖縄的な社会規範や慣習が形成されていったのではないかと、これが本研究における仮説である。

#### 4. 研究成果

この研究によって、沖縄的社会規範の歴史的構築について、以下のようなことが明らかとなってきた。

戦後の沖縄社会は、どのような社会だろうか。沖縄の人びとは、戦後の社会変動をどのように経験したのだろうか。

私は現在、沖縄戦の経験者の聞き取りをしている。数十人の方からその生活史を聞きながら、私は徐々に、沖縄戦と沖縄の戦後が「つながっている」と感じるようになった。それは言われてみれば当たり前のことなのだが、生活史の聞き取りを続けるなかで、あらためて実感することになった。

1945年3月から6月まで続いた沖縄戦では、他府県出身将兵6万5908名、沖縄出身将兵(防衛隊を含む)2万8228名、準軍属を含めた一般の沖縄県民およそ9万名~15万名の犠牲者を出した。1945年6月23日に日本軍の組織的な抵抗が停止したあと米軍はこの島を占領した。この占領は1972年5月まで続くことになる。

沖縄の人びとはこの戦争をどのように体験したのだろうか。いうまでもなくそれは多様で複雑だ。本稿における沖縄戦後史の議論をはじめのまえに、まずその前提として、私自身がおこなっている「沖縄戦と戦後の生活史」の聞き取り調査から、戦時下と終戦直後に沖縄の人びとが体験したことを以下で再構成してみよう。

1944年の10月10日、いわゆる「十空襲」によって本格的な沖縄本島への攻撃が始まり、45年3月に慶良間諸島を経て読谷に上陸するころから、沖縄本島の人びとの避難が始まる。南部へ逃れた人びとは、糸満での凄惨で残酷な地上戦を経験する。北部へ逃れた人びとは、やんばるの山、深い森の奥に隠れていたものも多かったが、食料や医薬品不足に悩まされ、そして何より、日本軍の敗残兵からひどい仕打ちを受けてた。本土に疎開した人びとは、比較的穏やかな暮らしを送ることができたが、慣れない内地の生活に多大な苦労を経験した。そして多くの沖縄本島の人びとが戦闘終了後に米軍の捕虜になり、本島各地に急拵えで設置された収容所に収容されることになった。

沖縄戦とその直後の戦後復興期において、そしてさらに占領期において沖縄の人びとが経験したことは、いうまでもなく簡単にひとことでまとめることはできないが、ここであえて「所有権」という観点からみれば、戦争と戦後の沖縄が経験したことは「所有権の解体と再編」だったということがいえるのではないかと。

米軍上陸直前、日本軍はすでに沖縄に配備され、本島内各地に展開していたが、多くの場合、日本兵の住居や倉庫として、沖縄の学校や個人の住宅が接収され使用されていた。その使用に際して沖縄の人びと



せた。沖縄の人びとのあいだでは、戦争と戦後はつながっているのだ。横取りされた物資は多くは食料だが、大量の自動車部品を持ってかえって売りさばいたというひともち、なかにはベッドのマットレスを肩にかついで堂々と基地から持って帰ったというものもいた。おそらく米兵も黙認していたのだろう。

朝鮮戦争が始まると、国際的な鉄の価格の上昇にともない、沖縄に「スクラップブーム」が到来する。「鉄の暴風」と言われるほどの艦砲射撃を経験した沖縄本島では、いたるところの地面の下に、不発弾をふくむ鉄くずが埋まっていた。子どもを含むたくさんの沖縄の人びとが地面を掘り返し、この鉄くずを集めて売りさばいていたという。不発弾の事故によって怪我をしたり亡くなったものも多かった。ある語り手は、沖縄戦のあと収容所に入れられ、そこから嘉手納基地の黙認耕作地の中で芋や豚を育て、地面を掘り返して鉄くずを集めたという物語を切れ目なく語った。その物語の切れ目の無さは、そのまま沖縄の人びとの歴史経験の切れ目の無さである。地面を掘って芋を育てること、地面を掘って鉄くずを集めることは、どちらも暮らしのなかで日常的におこなわれることだったのだ。

そして1972年まで米民政府による統治が続く。それが終わってからも、あいかわらず広大な基地が残されたままだ。この間にいかに沖縄の基本的な人権が保障されてこなかったかについては、ここで詳しく述べるまでもないだろう。

沖縄が、戦争と戦後を通じて経験したことは、ある側面からみれば「所有権の解体と再編成」であったと言える。社会秩序の根源である私的所有権が保証されない状態だったのだ。くわえて戦後の沖縄では社会保障は非常に不十分なままで、貧困も放置されていた。その状態で沖縄は、50年代後半からの高度成長と那覇都市圏の急激な膨張の時代に突入していくのである。本稿の仮説をひとことではいえば、所有権をはじめとするさまざまな権利が保証されない社会では、「自分のことは自分で守る」感覚が広く、深く形成されていくだろう。

(以上の文は、岸政彦・梶谷懐(編)『所有とは何か』所収の拙論文「所有と規範 戦後沖縄の社会変動と所有権の再編」と重複する。)

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岸政彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 沖縄にとって「地元」とは何か	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岸政彦・打越正行・上原健太郎・上間陽子 『地元を生きる 沖縄的共同性の社会学』 ナカニシヤ出版	6. 最初と最後の頁 省略
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸政彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 距離化 安定層の生活史	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岸政彦・打越正行・上原健太郎・上間陽子 『地元を生きる 沖縄的共同性の社会学』 ナカニシヤ出版	6. 最初と最後の頁 省略
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸政彦	4. 巻 60(4)
2. 論文標題 聞くという経験	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文藝	6. 最初と最後の頁 省略
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸政彦	4. 巻 76(11)
2. 論文標題 沖縄ジャズの生活史 テリー重田と上原昌栄	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文学界	6. 最初と最後の頁 省略
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸政彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 芋と鉄くず 歴史のなかの「沖縄的共同性」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岸政彦(編)『生活史論集』 ナカニシヤ出版	6. 最初と最後の頁 省略
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸政彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 所有と規範 戦後沖縄の社会変動と所有権の再編	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岸政彦・梶谷懐(編)『所有とは何か ヒト・社会・資本主義の根源』 中央公論新社	6. 最初と最後の頁 省略
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸政彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 実在と合理性 生活史とは何か	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北田暁大・筒井淳也(編)『岩波講座社会学 第1巻 理論・方法』 岩波書店	6. 最初と最後の頁 省略
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸政彦	4. 巻 121(1)
2. 論文標題 間違った世界で生きる、そしてそのことを書く	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 新潮	6. 最初と最後の頁 省略
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岸政彦
2. 発表標題 シンポジウム報告「ディープストーリーの「深さ」はどれくらい？」
3. 学会等名 分析哲学会シンポジウム「社会学と哲学の協業に向けて 質的調査・推論主義・プラグマティズム」（キャンパスプラザ京都）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岸政彦
2. 発表標題 口頭発表「ナラティブなんて存在しない？」 誌上シンポジウム「あしもとの歴史を見つめる 語り、書き、あらかず」
3. 学会等名 日本民俗学会（オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岸政彦
2. 発表標題 シンポジウム「琉球沖縄を生きた民の歴史 沖縄戦記録、郷友会調査から」
3. 学会等名 沖縄社会学会（オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岸政彦
2. 発表標題 国際シンポジウム報告「芋と鉄くず 個人的体験としての沖縄戦と戦後占領期」
3. 学会等名 「歴史・人生・物語 東アジアのオーラルヒストリー研究」 東アジア生活史研究会（オンライン開催）
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 岸政彦
2. 発表標題 口頭発表「正史と反-正史のあいだで、なにを書けば「現代史」になるのか
3. 学会等名 琉球沖縄歴史学会（オンライン開催）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 岸政彦（編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 530
3. 書名 生活史論集	

1. 著者名 岸 政彦	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 1216
3. 書名 東京の生活史	

1. 著者名 岸政彦・打越正行・上原健太郎・上間陽子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 472
3. 書名 地元を生きる 沖縄的共同性の社会学	

1. 著者名 岸政彦	4. 発行年 2020年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 99
3. 書名 100分de名著 ブルデュール『ディスタンクシオン』	

1. 著者名 石原昌家・岸政彦（監修）沖縄タイムス社（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 880
3. 書名 沖縄の生活史	

1. 著者名 岸政彦・梶谷懐（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 384
3. 書名 所有とは何か ヒト・社会・資本主義の根源	

1. 著者名 北田暁大・筒井淳也（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 312
3. 書名 岩波講座社会学 第1巻 理論・方法	

1. 著者名 岸政彦・稲場圭信・丹野清人（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 290
3. 書名 岩波講座社会学 第3巻 宗教・エスニシティ	

1. 著者名 岸政彦・川野英二（編）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 304
3. 書名 岩波講座社会学 第2巻 都市・地域	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 歴史・人生・物語 東アジアのオーラルヒストリー研究	開催年 2022年～2022年
-------------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------